

あとがきに代えて

そして予感に満ちたシリーズ「越境へ」

佐谷和彦

今回の企画展は田中清光作品展「一九九五―二〇〇〇」「東京大空襲」そして「越境へ」である。会期は三月二日(金)から一七日(土)まで、日曜は休廊。会場はギャラリー池田美術(銀座一―八―八、渡辺ビル四F)であります。

詩人田中清光(一九三一年―)の初の絵画作品展である。展示作品は二五点でデカルコマニーおよびデカルコマニーをベースに新たな手法を加えた作品で構成されている。

カタログの内容は、前半は「東京大空襲」の詩集を前面に出しオレンジ色のデカルコマニーの作品を四点収録している。後半は一九九五年から二〇〇〇年に至る田中清光作品集として七点を収録するとともに作者のエッセー「火の足跡」と作者年譜および私のあとがきを収録した。

ここで、今回の展覧会の経緯を述べることにする。田中清光さんは詩集、評論等も多く、つとに詩人として関係者の間では名が高い。したがって絵画作品となると驚かれる方もあると思われる。実は私もその一人なのであった。

注意深い田中清光の詩の愛読者には、その絵画的兆候を感じておられた方もおられると思われる。昨年六月に思潮社から刊行された詩集『再生』のカバーおよび扉にデカルコマニーの作品が二点使用されている。その作品の作

者は、実のところ田中さんなのである。目次の最後に装画Ⅱ田中清光と記されている。

私がいかに田中さんのデカルコマニーの作品を見たのは詩集『東京大空襲』一九九五年八月、月草舎刊行の特製版を手にした時である。その扉に、オレンジ色に輝くデカルコマニーの作品があった。私は美しいと思った。

と同時にこの作品が「東京大空襲」で一〇万人の人間が亡くなった一九四五年三月一〇日の空をイメージしたものであると気づき、一転して複雑な心境となったのである。急速に深海に沈んで行くのを感じ、その重圧で私の胸は痛くなった。

地獄の空の色はこんなに美しいものなのか？ いや、正視することが不可能な地獄の底は火焰の海で、それ自体がオレンジ色なのだ。そのなかを、必死になって逃げまわる当時中学二年生の田中清光の姿が私には見えてくる。しかし、私の想像は飽くまでも想像であり、体験者の見た現実ではない。フト見上げた空はオレンジ色なのだ。地上の狂気の風景が現実であれば、遠いはるかな天上の静寂の空も現実なのである。想像する私自身が混乱し、衝撃のあまり言葉もなく、ただただ唸るのみであった。

しばらくして、私は田中さんにデカルコマニーの作品を見せていただくことになり、昨秋某日、ご自宅を訪ね、作品を見せていただいた。作品を見て驚いた。これは新発見だ、という想いが湧いてきたのである。特に、九六年のシリーズ「飛翔——カオスからの」そして二〇〇〇年のシリーズ「越境へ」

には、そのダイナミックな力強さに圧倒された。数日後、私は田中さんに来年三月一〇日頃、展覧会を開催したいと申し入れた。田中さんは驚かれたが、了承され、この展覧会となった。

田中さんと私は南画廊でお会いして以来の友人で、二七、八年のおつき合いです。現代美術が好きで、P・クレイ、M・エルンスト、J・ミロ、A・ジヤコメッティ、ヴォルス、J・コーネル、加納光於、荒川修作、野中ユリ等シユル系の作家に興味があり、瀧口修造を敬愛されている。私とほぼ同年代で、二人とも銀行員の経験があること、さらに不思議なことにも四五歳で銀行を退職、それぞれの道を歩むことになった。共通点が多い間柄なのである。詩人の田中さんがデカルコマニーに興味を持ち、言葉で表現できないものをデカルコマニーに託する気持ちになられるのは自然なことだと私は思う。特に瀧口修造の影響が大きい。

では、何故、一九九五年に「東京大空襲」の詩が生まれ、同時にオレンジ色のデカルコマニーが出現したか？ この理由と契機が私には興味がある。

最大の原因は、一九九一年の夏、田中さんが胃癌の手術をしたことにある。その際院内感染（MRSA）を併発、一カ月間ビニールパイプで注入される薬液のみで命をつなぐという死に直面する危機にさらされ、その後遺症で現在も病院に通院中なのである。

この体験が田中清光の生き方を変えた。余分なものはサッパリ捨てる心境となり、内のものも、外のものもよく見えるようになったと言う。

「東京大空襲」の一九九行におよぶ長編の詩は親友Kに捧げるレクイエムである。この親友Kとその背後に存在する一〇万人の人々と五〇年間、田中さんは対話をし続けていたのである。そして田中さんの生き方が変わったのを契機にこの詩が誕生した。

それと同時期に長年、デカルコマニーに興味を持ち、この絵画の手法による表現を実現したいという想いが、一挙にまるで噴水のように噴き上がってきたのである。詩、文学、絵画についての田中さんの地下水脈が如何に豊かなものであるかを、示すものである。

この胃癌手術以降、療養の合間を縫って、詩集『風の家』（一九九三年）、『空峠』（一九九四年）、『岸辺にて』（一九九六年）、『再生』（二〇〇〇年）が刊行されている。これらの詩集は現代詩の読者および識者から高い評価を得ている。

最新作『再生』のなかの「人間の悲しみ」に次の言葉がある。

——おお 死に残ったぼくには いま何をするものが残されているのか——

この言葉は私に向って話されていると受け取っている。残されたしごとをはずきりと掴み、自分のしごとをやるほかないと私は思っている。

当初はアンドレ・ブルトンの言うデカルコマニーを出発点に、スタティックな表現であった作品は、昨年大きく変貌した。その兆しは一九九六年のシリ

ーズ「飛翔―カオスからの」に感ぜられる。新しい手法が加わり、作品はカラフルでサイズも大きくダイナミックなものとなった。そこには作者の再生の強い意志が滲み出ている。このシリーズが「越境へ」と名付けられているのは暗示的である。新しい精神が生まれる予感を私は感じている。

一九四五年三月一〇日の東京大空襲はこの國の危急存亡の原点であった。現在の風化した政治、経済、社会、芸術文化の諸状況を見ると、精神的な退廃、腐敗のニオイを感じる。危機感を覚えるのは私一人ではないと思う。五年前の原点に立ち返り、「再生」予感の観点から、この田中清光展をご覧いただければ幸いです。

この展覧会が立ち上がったことを私は大変うれしく、田中清光さんに感謝している。切に御自愛をお祈りいたすとともに、新しいしごとに期待しております。

最後にギャラリー池田美術の池田一朗さんには会場をお貸しいただく等ご協力いただき感謝いたします。そして、カタログでは浅井潔さんの親身なご協力をありがたく思っている。その他、名前を記さないが多くの方々にご協力を得たことに感謝申し上げます、結びの言葉といたします。

二〇〇一年二月一日